

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	坂部 裕美子（さかべ ゆみこ）
○学位の種類	博士（文学）
○授与番号	甲 第950号
○授与年月日	2014年3月31日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	「伝統芸能」のいま—戦後歌舞伎・落語興行の計量分析から—
○審査委員	（主査）赤間 亮（立命館大学文学部教授） 矢野 桂司（立命館大学文学部教授） 矢野 環（同志社大学文化情報学部・ 文化情報学研究科教授）

<論文の内容の要旨>

「古典芸能」「伝統芸能」などと呼称される無形文化は、日本では、現在も商業活動が成立し、活発に興行されている。これらの興行情報を計量的に分析することで、経験的な見地をもとに議論されてきたこの分野への評価を、客観的化、あるいは可視化することで、伝統芸能の現在や未来を考ようとする論文である。

章立ては序章・終章を含めて、以下の全7章からなる。以下、本論文の要旨を記す。

【序章】まず、「伝統芸能」の内、2000年代に入ってから、歌舞伎や落語の興行にかかわるデータベースが作成されたことにより、それを使った数値分析が可能となった前提について説明する。それを活用した分析の結果、二分野に共通する特徴として「演目の大きな偏り」を指摘し、論文全体の大枠を提示する。伝統芸能という同族経営的な興行界の中で、個人評価に直結する数値データは秘匿性が高いというこの分野の限界を指摘しつつ、本論文の意義について総括的に述べる。

また、分析の対象となる「伝統芸能」の定義を試みる。類縁語である「古典芸能」「民俗芸能」との使用実態や辞書類での定義、さらには、法律や顕彰制度等での条文を調査する。加えて、統計調査における扱いについても触れ、「伝統芸能」の範囲と各種芸能の合致度を定める。なお、本章では、各種伝統芸能の「純粋な鑑賞者」の多寡と、上述の伝統芸能との合致度による位置座標図を提示し、各種伝統芸能それぞれの特性を可視化した。

次に、本論文の研究手法を明示する。興行データベースを使った伝統芸能の興行実態先行研究は、1980年代に行われた歌舞伎学会の調査があるのみとし、この調査では、興行の演目の分類という単一の目的の結果以外には提示できていない弱点を指摘する。それに対

し、本論文は、データベース化された興行情報を計量的な手法により数値分析して、演目の偏りの実状や上演状況にまで及んだ検証を行うという。

歌舞伎、落語という2分野の興行データベースを詳細な分析を行ない、さらに類縁性の高い、文楽、長い興行史がありながら「伝統芸能」の範疇に入っていない宝塚歌劇、さらには、形態は大きく異なるがやはり伝統芸能の周縁に位置する相撲との比較も試みるという構成を概観する。

なお、データベースのデータ集計作業については、集計用データとして整備する作業量の膨大さや、データクリーニングや整備の工夫だけでなく、対象とする芸能ごとの固有の様々な問題について紹介している。

【第1章】ここでは、歌舞伎興行の分析を行う。現在の歌舞伎興行の実態について概略したあと、興行データは、日本俳優協会が編集・公開している昭和21年(1946)から平成17年(2005)の公演情報の貸与を受けたもので、そのデータ構造の特徴と本分析のためのデータの再整備の具体的内容について述べる。本データは興行情報のため、公演数と期間との関係の整備、歌舞伎興行と判断する基準の策定などを行った。その上で、まず戦後の歌舞伎公演の上演回数の変化を関東・関西の公演数を考慮して示し、戦後急速に関西歌舞伎が衰頹したこと、全体として、1990年代から公演数が続伸していることが明らかになった。さらに日本俳優協会データ(2005年まで)以降の、論者が独自に収集した2006年から2010年までの上演データとを比較することで、最近5年間との比較が、歌舞伎公演の動向の考察に明確に役に立つことにより、時期を細かく区切った分析が効果的な点も指摘している。

また、演目別の上演頻度を集計し、いわゆる三大歌舞伎が圧倒的な頻度を示す点を確認、「忠臣蔵」のみ通し興行が多い点など、それぞれの演目により上演実態に傾向が存在することを明らかにする。また、忠臣蔵は、各段が比較的バランスよく上演されるのに対し、「千本桜」や「菅原」が特定の幕に集中する傾向があること、一方で、これら三大演目の中にあっても上演頻度の少ない幕は、ほとんど上演される機会がないことに注目、その理由について考察している。

第3節では、その次に来る人気演目「勸進帳」について、人気の理由を、論者の観劇経験と一般的な評価を踏まえた作品の特性として7要素を仮説として設定し、その規準を上演頻度の高い200演目に当て嵌め、上演頻度との相関性を数量化した。しかし、この7要素だけでは、明確な関連を読み取ることができず、一般的な作品の評価は上演頻度と相関しないという結果を導き出す。

第4節で検討しているのは、歌舞伎における役の格付けという、数値化の難しい課題である。配役データは、きわめて膨大なデータとなるため、本論考では、上演回数が50回以上の古典歌舞伎11演目に絞り、格上と各下の判断のしやすい女形が演じる役について分析する。役者の年齢や、役者の格付では、受賞歴を使いWardの最分散法を使い、クラス分析を行なってデンドログラムを描き、役の「格」に関する配役のグループ分けに成功した。この手法を用いれば、近年頻発する「格」を飛越えた配役などの例外や動向の変

化なども推測する手法の開発も可能であるとの結果を得ている。

第5節では、襲名等、代々芸の継承される傾向の強い歌舞伎の世界において、役者の配役傾向の世代間比較を試みる。歌舞伎では親子で役柄が踏襲される傾向があり、長期の比較が可能な役者4組の親子（17代目中村勘三郎と18代目勘三郎ら）について、二つの事象について分析する。一つは、「忠臣蔵」を例にとり、2代にわたる役者がどの年齢で役に就き、ステップアップしていったかを、それぞれの親子について事例をあげ、子世代の方が、十分経験を経ずして格上の役につく傾向を指摘する。また、36～40歳において親世代と子世代とでは、演じた役の数は、親の方が多いという傾向が如実であり、若手世代の経験不足という批判が正しかったことを証明する。

第6節では、上演演目の偏りについて、再演の頻度をみることで1965年をピークに再演頻度の高い演目の比率が増え続け、1995年においては、ほぼ92%の演目が、この戦後5回以上の上演を繰り返していることを可視化し、その是非を巡って論じている。

以上、本章は、歌舞伎上演データを活用し、統計解析手法を使い、これまで演目別上演数の集計結果しか存在しなかったこの分野において、初めて広範囲にわたった視点で分析を行ったものであると位置づける。

【第2章】落語の興行について、寄席への出演回数を分析することで考察する。最初に、現在の落語界とその興行の仕組みについて概観する。また、落語の分析に使用したデータは、出演者一覧である「カケブレ」のデジタル画像での提供をうけ、論者自らがテキスト化して作成したものである。全体の傾向を見るべく、最初に、落語協会のデータを取り上げ、全出演者の登場回数を数えると、275名中に最高で60回の演者がある一方で、1回未満の演者が13名、ここには現れない全く出演のない会員も16名おり、予想以上に偏った出演状況にあるとする。また、「色物」の登場頻度は、落語よりも多いが、寄席番組の構成上色物枠の数の割に、演者が少ないからであるとする。

第2節では、これをうけ、登場回数を決定づける要因について分析追求する。一つは、真打昇進以降の経過年数であるが、年功序列の世界にもかかわらず、出演数は経過年数とは相関がほとんどない。しかし、実力によって担当させられる傾向のある「トリ」を取る回数（ならびに中入の回数）との関連でみると、相関関係が認められる。ただし、最も「トリ」を取る回数が多かった演者は、登場すれば「トリ」を取るが、それほど寄席に出演する訳ではないことも指摘する。さらに、抜擢昇進との関連を試み、抜擢した時に何人を抜いたかを数値化した抜き数と登場回数は相関関係がないが、抜擢昇進グループか否かによって検証すると、抜擢昇進した演者の方が、出演数の多くなる傾向がはっきり出ており、正月の初席の出演者は、登場回数が多くなるという相関も確認できた。さらには、同時期での複数の寄席への掛け持ち出演回数と登場数は、当然のことながら相関があり、寄席から必要とされる演者の登場回数が多くなるといういわば当たり前の現象が、数値としても確認できるとする。

第3節では、登場回数の時系列比較を行う。しかし、落語の場合、興行上の様々な条件

が大きく変化しているので、一つ目の方法としては、1985年と2005年の概況を比較する。結果、20年後でも顔ぶれに重複する演者が多く、また、20年後で比較すると「広く浅く」トリをとるようになり、中入りの重みが増していること、掛け持ちが減ったことがわかる。また、20年後を経ても上位にあり登場数の変化のない2名、85年に真打ちになり、05年には登場回数が激増している2名、85年には常連だったが加齢により05年は激減している3名、激減しているが必ずトリか中入りをつとめる落語協会会長の小三治の例、20年を経ても登場数の少ないテレビタレント化した落語家の例を挙げている。これをうけ、長期比較を試み、1970年から2010年の登場回数をヒストグラム化して示すと、寡占化がより進んでいることが予想できた。これには、落語家の高齢化も一つの理由として挙げられるという。

第4節では、「一門」ごとの登場回数比較を行う。一門は、論者の独自の区分を当てはめ、一門を10区分とした上で、生年が1950年以前、1970年以前、それ以降という3世代に分割して分析する。その結果、小さん一門、志ん生一門による寡占状態にあることが判明した。そして、ここに落語協会分裂騒動の理由の一つを見出している。次に一門の世代交代を一門毎にグラフ化し、小さん一門の盤石さだけでなく、世代交代への対応の早さも指摘する。

第5節では、歌舞伎が世襲制であるように、近年、親子での襲名が話題になる落語界であるが、親から子への継承は、寄席への登場回数ではどのように現れてくるのか。25年間に親子で落語協会に在籍した7組について分析している。結果は、落語では、親から子への委譲はあまりなく、むしろ一門の一番弟子がそれを担う傾向がみとれた。

第6節では、もう一つの協会である落語芸術協会興行との比較を行う。データは、1980年から2000年までである。ここでは、厚生経済学で使われる所得格差を示す指標を使用する。芸協の場合、落語協会と比較して、出演者数の変化が20年間でほとんどなく、より格差が少なく、一致団結した活動にも結び着いている傾向が見て取れる。ここでは、前座の在籍期間についてもふれ、芸協の方が落語協会よりも長い結果となった。ここでは、両協会の弟子入りの状況について分析するが、トリをとることの多い師匠を選ぶことが多く、弟子入り段階で弟子をとれる師匠が限られていて、そこに集ることも判明した。なお、調査の過程で、古いカケブレに記録された伝達事項により、落語協会とは異なる、芸協の興行実態について、外部者の進出を許しているという新しい見解を提示する。

まとめでは、落語の「演題」集計の可否、落語界の評価指標としての「香盤」よりもカケブレデータの分析の方が、実態に即していることを明言する。

【第3章】本章では、文楽、宝塚、相撲という他の芸能興行の分析と比較を行う。

第1節の文楽興行の分析では、日本芸術文化振興会（国立劇場）がWEB上で公開している「文化デジタルライブラリー」文楽興行記録を使用し、独自にデータベース化し、演目別の公演回数を分析した。文楽は、歌舞伎と違い、演目の集約化は顕著ではなく、また、上演が1回のみでの演目も比較的少ない点を指摘した。「通し」上演と一幕上演とでの「重

みづけ」については、行っておらず、今後の再検討も必要とする。

第2節では宝塚歌劇の分析を行う。宝塚の特徴を指摘した上で、伝統芸能との類似性を踏まえ、その上で演者の在籍期間と演目数について分析する。他の芸能と違い、女性のみの劇団ということで、在籍年数が相対的に短い点が指摘できるが、男役の平均 8.91 年、娘役平均 8.12 年の数値を提示する。これと男役、娘役それぞれの「トップ就任」という仕組みを軸に、新人公演主演、小劇場主任、組替えというトップの「兆し」要素を組込んで分析すると、これらの経験を持つ演者の在籍年数は 10 年を超え、3 要素何れも経験した演者は、63.24%がトップ就任している。

上演演目については、「ベルばら」が大差をつけて 1 位であるが、その全体に対する比率は低く、新作主体の興行傾向である。再演傾向については、平成以降に目立ち始めるが、これについては、観客層の高齢化と閉塞化についてふれつつ考察し、なお、歴史の中で様々な変貌を続けているとする。

第3節では相撲興行を取り上げる。相撲は、伝統芸能と一面類似性があり、興行案内としての番付が出演者一覧となっていて落語と共通しているとする。1961 年から 2010 年の 50 年間にわたる春場所の番付を使い、十両以上の力士について集計し、演劇における演目上演数と同様に比較し、入れ替わりが激しい点を指摘する。現役期間については、1981 年から 2000 年までの総入門者でみると、2 年目までに辞める力士が圧倒的に多く、平均としては、6.12 年となる。また、9 年以下の力士は 9 割が幕下以下であり、関取経験者は、14.64 年付近の正規分布となる。

以上、第三章については、データ整備が十分ではないため、十分な分析の成果は得られないものの、歌舞伎や落語の興行構造を客観視すること上で、参考になる。

【第4章】第三章までのデータ分析を踏まえ、伝統芸能に共通する特性について、まとめている。第1節で、データ集計上からみえる特性として、興行の歴史が長いことが第一点。興行場所・期間が固定的であることが第二点。これによって、広告費用等の節約が大幅に可能となる。さらに、演者の世代交代について、世代の交代システムが出来上って居る点、新規参入や退出が少ない点も上げられるとする。また、演目の集約化や演者のジェンダーについても言及する。第2節では、データ値以外で「伝統芸能」に共通と思われる事項を列挙して参考とし、他の終演芸能を対象とした継続的な分析の必要性を述べる。

【第5章】本章では、データ分析を踏まえ、自らの鑑賞者としての長い経験をもとに、分析対象としてきた「伝統芸能」の現状について、歌舞伎興行、落語興行のそれぞれに対する提言である。

【まとめ】最後に、第三章までの統計分析の結果と手法を再分析し、この分野にこうした統計分析を手法として取り入れる研究自体を総括し、今後の可能性について述べる。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、戦後から現在にわたる「伝統芸能」の興行を対象に、それらの興行に関わる

データベースを用いて、統計分析の手法を使うことで、興行パターン的一端を明らかにし、それによって伝統芸能を定義づけるものは何かを明らかにしようとした論文である。具体的には、歌舞伎の上演演目、役者、落語の寄席出演の頻度や一門と呼ばれる芸系などによる、興行パターンについて、数量的な実証によって明らかにする。さらには、歌舞伎・落語以外の「伝統芸能」やその周縁的なものとして、文楽、宝塚歌劇団、相撲を取り挙げ、歌舞伎や落語の興行パターンとの類似性を明らかにした。その結果、日本の伝統芸能に固有な興行パターン、少数の演目の繰返し、特定の役者や落語家の突出した出演など、これまで漠然とした認識でしかなかった現象を、計量的に実証することに成功している。

第一に評価されるのは、こうした手法でこの分野の研究に取り組んだ先駆的な論文である点である。分析に使われるデータの整備が未だ進んでおらず、そのデータそのものを準備するために、多大な労力を掛けてきた努力について言及する必要がある。歌舞伎の場合、俳優協会が作成した戦後から現代にわたる興行データの提供を受けることでこの研究が開始されるが、この興行データ自体は、演目や配役を中心とする上演情報のみであり、同一内容演目の異称、役者の襲名による改名など、この業界特有の慣習があるためおきるデータ上の混乱があり、計量的な分析に耐えられるデータとするためには、伝統芸能に関する深い専門知識が必要となる。さらに、多面的な分析のためには、データへの適切なタグ付けや「重み」付けを行う必要もあり、統計学と芸能史学、ならびに作品分析の上では、日本文学の知識を併せ持って始めて可能となる研究である点において評価できる。さらに落語の場合、一次資料である「カケブレ」(のデジタル画像)のみの提供を受け、この楽屋内で使われる肉筆資料を<解説する>段階からスタートして大量の分析用データを自力作成している。もちろん内容の解説自体に落語の専門知識が必要であるため、かけた労力や時間を考えれば、その努力自体を評価するべきものである。

第一章の歌舞伎について、こうしたデータを駆使し、演目の偏りなどを実際に示した得たことは、伝統芸能の興行記録の新しい分析として評価できるだろう。上述の通り、単純な上演データを様々に改良し、筆者独自の知識を元に、タグ付けを行うことで、複眼的な視点を用意し、立体的に歌舞伎興行を分析することに成功したのである。上演頻度については、上演地域から、上方歌舞伎の衰退と現状、三大歌舞伎とよばれる人気演目の個別上演傾向の抽出、「勸進帳」の一般的作品評価を計量的手法で再検討した場合の妥当性(ただし、本論では、不一致)、さらには、経験知によって常識化している役の「格」から見た役者のランク付けの相関など、著者ならではの視点による分析が繰広げられる。そして、データの標本数としては、不足であるもの、役者の世代間で配役の傾向を見ることで、他芸能とも貫通する継承問題について論じている点も本研究手法の今後の可能性を示唆する。

第二章の落語については、歌舞伎と同様に複数の視点を様々と分析手法を駆使してより興味深い分析になった。特定の演者の突出した寄席への出演状況や、一門の優勢状況などは、論文中で筆者が触れるように、楽屋内においても経験知としてある程度認知されているものであるが、数値をもとに可視化され、その認識にあまりずれがないことが確認されることは、こうした統計的手法の妥当性を示すものである。この分析をもとに、落語協会分裂騒動への新たな考察を導き出した点、また、単に出演数だけでなく、関東の2落語協会や各一門の世代交代の様相も可視化して示した点は、第一章と同様、伝統芸能の将来を考える上で貴重な分析となっている。

一方、第三章は、文楽、宝塚歌劇、相撲とバラエティに富んだ対象を取上げたが、分析するデータ量が不足しており、演目の偏向傾向について、文楽、宝塚それぞれに特有の結果が得られた以外は、1, 2章との有機的な繋がりも確保するに至らなかった。

第4章、第5章については、論証方法として、筆者の経験に依拠するところが多く、客観性が十分とは言えないという弱点が認められる。

また、統計的手法をとらない従来記述的な研究（たとえば歌舞伎学会の「歌舞伎白書」など）との比較により、本論文の新たな知見の価値をより明確にする部分が欠落しているのが惜しい。

全体を通じて、主要な結果である、少数の演目、あるいは少人数の落語家の専有度が高いという事実は、いわゆる「80-20の法則」の例が増えたということであろう。但し、その分布について論文内で明確な確認が行われていないのは残念である。

また、公開審査においては、今後の課題として、先駆的な研究であるだけに、データベースの構造や、分析の試行錯誤のプロセスの記録についても、記述しておくべきであったとの指摘があった。

分析枠組みとして、興行パターンに影響を与える様々な環境要因や戦前の状況、さらには江戸期の状況などについても遡って考えるべき点が指摘された。さらに、今回、対象としなかった典型的な伝統芸能である能楽や雅楽などに対象を広げてほしいという助言の上で、こうした分野を統合的に比較するための統計量の開発が次の課題になるとの指摘もあった。

申請者自身が述べるように、本論文は興行データ分析の第一歩というべきもので、現時点では、「興行データ集計」の第一歩を踏出した点に大きな意味がある。今後の研究に「データの改良」「異なる視角からの分析」「分析手法の変更によるより精緻な分析」などの幾多の進展の可能性を提起することができたこと、またこうした研究手法が伝統芸能研究にも可能であることが証明された事実に大きな意義が見出せ、地理学分野における1960年代以降の計量革命と同様な変化の可能性を示唆する重要な論文となる可能性がある。

以上、課題も多く指摘できるものの、全体としてたいへん意欲的研究であり、とりわけ第一章、第二章での分析による成果、到達度の高さからいって、博士論文としての十分な学術的水準にあることは明確である。よって、審査委員は一致して、本論文が博士学位を授与するに値するものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2013年12月26日（木）13時から15時30分まで、アトリサーチセンター会議室で行われた。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表や様々な研究活動、および公開審査の質疑応答を通じて博士学位に相応しい能力を有することを確認した。また、英語の論文要旨の内容から、外国語の能力も十分であることが確認された。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。